

## —昔の暮らし展—

2019年12月7日（土）～2020年2月24日（月・祝）

名称	読み方	数量	材質等	時代	解説
<b>第1章 一暮らす</b>					
湯たんぽ	ゆたんぽ	2点	ブリキ製/陶製	昭和	ゆたんぽの歴史は古く、中国では今から約1400年前頃から使われていたそうです。日本では600年前の室町時代(むろまちじだい)から使われていたそうです。陶製は江戸(えど)時代には使われており、ブリキ製は大正(たいしょう)時代頃から普及し、現在は様々な材料(ざいりょう)から作られています。陶製の特徴(とくちょう)は、熱が逃げないと、朝まで熱を保つ(も)つことができ、ブリキ製は熱伝導(ねでんどう)が高く、すぐにつかだを温められます。
回転こたつ	かいてんこたつ	1台	鉄製/木製	昭和	かごの中の鐵箱(てつばこ)に炭(すみ)を入れ、布団(ふとん)をかけて足ともをあためました。箱が回転(かいてん)するようになっているため、足が当たっても炭がこぼれることなく寝(ねん)ぐ間に(ま)は、ずっと暖(あたたか)いまま使えます。
電気あんか	でんきあんか	1台	金属製 (ナショナル/現・パナソニック製)	昭和	昭和30年代になって電気が普及(ふきゅう)すると、電気でふとんの足ともを温める、「あんか」が登場しました。湯たんぽと違(ちが)い、電気を使用するため、冷(さ)めることなく寝(ねん)ぐ間に(ま)は、ずっと暖(あたたか)いまま使えます。
扇風機	せんぶうき	1台	金属製 (芝浦製作所/現・東芝製)	昭和	電気扇風機は、1893(明治26)年に初めて輸入(いりゆう)されました。その後、研究(けんきゅう)を重ね、日本初の国産(こくさん)扇風機を開発(かいはつ)したのが芝浦製作所、現在の東芝になります。何度かの改良(かいりょう)を重ね、様々な機能を持つ扇風機が登場しています。
蚊取り線香	かとりせんこう	1点	紙製(箱)	明治	蚊取り線香の原料(げんりょう)になる除虫菊(じょちゅうきく)という植物は、1886(明治18)年にアメリカから日本に輸入されました。日本すぐに栽培(さいばい)が始まり、1890(明治23)年には、棒状(ぼうじょう)の蚊取り線香が開発されました。しかし棒状ではわずか60分しか燃えず、燃焼(ねんしよう)時間を延(の)ばすため、渦巻(うずまき)型が開発されました。
番傘	ばんがさ	1点	紙(和紙)、木他		番傘は和紙や竹、木を使って作られた日本古来(こらい)の傘です。和紙に油を塗(ぬ)ることで、水をはじいて雨傘として使用するようになりました。
ラジオ「CONDOR」	らじお「こんどる」	1台	木製 (三井物産会社製)	昭和	「CONDOR」(コンドル)という製品名で販売(はんばい)されていたラジオです。正面に付いている、一番左は【音量(おんりょう)】、中央は【選局(せんきょく)】、右側は回路(かいろ)を動かすための【再生(さいせい)】という3つのつまみを操作して受信(うしん)しました。
8mmカメラ	8みりかめら	1台	金属製 (コダック社製)	昭和	このカメラは、1930年代からアメリカのコダック社が販売した「シネコダックエイトモデル60」です。中に8mmフィルムが入っており、ゼンマイの力で最長(さいちょう)125秒の動画撮影(どうがさつひ)ができました。また、販売当初はフィルムの値段を下げるため、今の様に音声も録音(ろくおん)できる機能はありませんでした。(サイレント)。
映写機	えいしやき	1台	金属製 (シーメンス社製)	昭和	ドイツのシーメンス社製の映写機(映画を映すための機械)です。8mmカメラで撮影したフィルムの動画をみることができます。8mmカメラとは元々家庭用で使用する為として発売され、多くの人が映像の撮影を楽しめようになりました。
電話(黒電話) ※600型電話機	でんわ(くろでんわ)	1台	塩化ビニール他 (沖電気工業製)	昭和	家庭用電話として、どの家庭にもあったダイヤル式の「黒電話」です。1980年代頃からFAX付きの電話や1990年代の携帯(けいたい)電話の普及により、次第(しだい)に姿(すがた)を消していきましたが、今でも【電話】というと、黒電話のようなマークを数多く見かけます。
計算機	けいさんき	1台	金属他 (日本計算機社製)	昭和	日本で初めて計算機の國産化に成功した、日本計算機社製のものです。たし算・ひき算以外にも、様々な計算ができる機能を備(そな)えています。1970年頃(さかに)に、小型電卓(こがたでんたく)が流通し、姿を消していきました。
計り	はかり	1台	金属他	昭和	テコの原理(げんり)を利用して、物の重さを計ります。おもりの位置(いち)を変えることで、計りたい重さを調整(ちようせい)しました。
蓄音機	ちくおんき	1台	木製 (コロンビア社製)	昭和	蓄音機は有名なエンジンが発明した物として有名です。横のハンドルでゼンマイを巻き、その力でレコードを回します。針(はり)に伝わった音は箱の中の金属のパイプを通り、大きな音を生み出します。
リードオルガン	りーどおるがん	1台	木製 (ヤマハ製)	昭和	「足踏(あしふ)ミオルガン」とも呼ばれる様に、足でペダルを踏んで、風を送ることで音が出ます。元々はキリスト教の教会(きょうかい)で聖歌(せいが)を歌うために造られた巨大(きょだい)な「パイオルガン」で、小型化されて一般家庭にも普及していました。
引札	ひきふだ	6枚	紙製		引札とは、現代(げんだい)のお店の案内広告(あんないこうこ)です。「(お店に)お客様(きゃくひん)を引く」からその様に呼ばれています。江戸時代から明治時代の印刷技術(いんさつきゅう)が広がっていく中で普及していきました。絵が先に描かれ、その後にお店名や情報(じょうほう)を入れていただきました。
<b>第2章 一食べる</b>					
一斗枡	いつとます	1口	木製	大正	中にお米やお酒などを入れて量(りょう)を計るもの。この中には一斗(18リットル)のお米が入ります。
机	ます	2口	木製	大正	お米を入れて、その量を計る道具です。この中には一升(いっしょ)(18リットル)、牛乳パック約2本分の米が入ります。最近では節分の豆まで豆を入れているところを見ることもあります。
蠅帳	はいちょう	1台	木製	昭和	蠅帳とは、食事を一時的に保護(ほご)するための器具(きぐ)の事です。こちらは、小さな戸棚(とだな)に網(あみ)が張(は)られ、この箱の中に食べ物・食器(しょくき)を入れて食べ物を守り、またハエの侵入(しんりゆ)も防ぎました。
七輪	しちりん	1口	陶製	昭和	中に火をこした炭を入れて網(あみ)の上で、魚などを焼いていました。珪藻土(けいそうど)という材質を使われているものが多く、外に熱が逃げないため、少ない燃料(ねんりょう)で調理(ちょうり)できます。また、外に熱が伝わりにくくなっているため、持ち運びも便利です。
羽釜	はがま	1口	鉄製	昭和	茶を沸かしたり、お米を炊く際に使用される釜(かま)です。吹(ふきこぼれないように、重い木のフタを上に置きます。現在は炊飯器(すいはんき)の普及によって見かけることは少なくなりましたが、より性能(せいのう)の良い羽釜も開発されています。
おひつ	おひつ	1台	木製	昭和	羽釜で炊いたごはんをこの中に入れて保温(ほおん)していました。柳(ひのき)で作られ、余分(よぶん)な水分をとり、ごはんが蒸れるのを防ぎます。
電気炊飯器	すいはんき	1台	金属製 (ナショナル/パナソニック製)	昭和	羽釜を使い、今まで炊いていたごはんを、電気の力でスイッチひとつでテーブルの上で炊けるようになりました。今では、羽釜とおひつの両方の役割(炊飯と保温)をもっている、ジャー炊飯器が普及しています。
トースター (片面焼き式/ポップアップ式)	とーすたー	1台	金属製 (東芝製)	昭和	両側のふたがあがき、パンを片面(ひがん)ずつ焼く道具です。この道具がもっと便利(べんり)になったのが「両面焼き」式のトースターで、パンが焼きあがると自動(じどう)でね上がります。(ポップアップ式)。
打出焼	うちでやき	2点	陶製	明治～昭和	打出焼とは、芦屋市(あしや)の東側の打出で作られていた焼物のことです。お茶碗などの食器をはじめ、数多くの作品が作られました。明治時代に齊藤幾太(さいとういくた)という人が打出に窯(かま)を作てから、跡(あと)を継いだ初代・阪口砂山(さかぐちさざん)、二代目砂山まで約60年間、芦屋の焼物として製作されました。
膳	ぜん	1脚	木製漆塗	昭和	食事のために整えられた料理を乗せる台で、一人分の食物や食器などを乗せて、一人ひとりに提供(ていきょう)されます。多くは漆塗(うるしぬり)で、多くは脚(あし)が付いています。
ちゃぶ台	ちゃぶだい	1台	木製	昭和	数人で使って食事をする時に用(つか)む台です。「ちゃぶ」とは、漢字では「卓袱」と書き、これの中国読み「チヨーフー」からきていました。明治時代から配膳(はいせん)に代わって普及して行きました。
唐箕	とうみ	1台	木製		脱(だっこく)したお米を唐箕(とうみ)の中に手動(しゅどう)で風を起こし、もみ殻(がら)、玄米などに選別(せんべつ)するための器具(きぐ)です。実の詰(つ)まつたものは一番手前の穴に落ち、もみ殻(かく)など軽いものは外に吹(ふ)き飛んでいきます。現代でも、ほぼ同じ構造(こうぞう)でお米を選別しているほど、大変優れた技術です。
<b>第3章 一遊ぶ</b>					
立板古	たてばんこ				立板古とは、現在で言う紙工作にあたり、歴史的な伝説の場面や、まち中のお店など、様々な場面を題材にしていました。
立板古 (俵藤太百足退治伝説)	たてばんこ (たわらのとうた むかでたいじでんせつ)	1点	紙製		俵藤太は、本名(ほんみょう)を藤原秀郷(ふじわらのひでさと)といい、平安(へいあん)時代に関東地方(かんとうちほう)の武将(ぶしょう)・平将門(たいらのまさかど)を討(う)つしたこと有名な人物です。百足伝説は、今のが滋賀県(しがけん)の瀬田唐橋(せたのかはなし)に住み着き人びとを怖(こわ)がせた大きな百足を俵太が弓で退治したというお話です。
立板古(水兵)	たてばんこ(すいへい)	1点	紙製		
立板古(まち中の酒屋)	たてばんこ(さかや)	1点	紙製		
百人一首	ひやくにんいつしゆ	1組	紙製(箱は木製)		百人一首は、本来は100人の和歌を選んだものを言いますが、現在、百人一首と言われると、藤原定家(ふじわらのまさかど)という人が選んだ「小倉百人一首(おぐらひやくにんいつしゆ)」を指(さ)す事が多いです。「5、7、5、7、7」に区分され、「5、7、5」を上の句、 「7、7」を下の句に分け、かるたでは下の句の札(ふだ)を取り合います。
大阪張子(馬)	おおさかはりこ(うま)	1点	紙製		大阪張子とは、江戸(えど)時代から大阪で製作された、紙で作られた立体のおもちゃです。他にも虎(とら)、だるまなどの種類があり、魔除(まよ)けや置物(おきもの)として親しまれています。現在も大阪府柏原市(かしわらし)に在して生産されています。
貝合せ	かいあわせ	1組	貝、塗料		蛤(マグロ)の貝殻(貝殻)は他の物とは重なり合わない特徴(つけう)、つまり1種類の貝殻としか合わないため、意味が転じて「結婚(けっこん)」の嫁入り道具としても使用されたそうです。
伏見土人形	ふしみつちにんぎょう	1点	土製(陶製)		名前通り京都(きょうと)の伏見で作られた土の人形で、日本全国にある土人形は、この伏見からはじまると言われています。その地域の伝説(でせつ)や、着ていたものなどを基(もと)につくられています。
伏見土人形(大日寺の牛)	ふしみつちにんぎょう (だいにちぢのうし)	1点	土製(陶製)		大日寺は明泉寺(みょうせんじ)といい神戸(こうべ)市にあるお寺です。大日の名前の通り、ご本尊(ほんづん)の「大日如来(だいにちゆらい)」は牛との関わりが深く「牛の寺」として信仰(しんこう)を集めています。
住吉土人形(虚無僧人形)	すみよしつちにんぎょう (こむそうにんぎょう)	1点	土製(陶製)		住吉土人形は、伏見土人形の影響(えいきょう)を受け、江戸時代の終わりころから、大阪の住吉大社(すみよしたいしゃ)付近で製作がはじまりました。伏見と比べると比較的(ひかくて)大きいものが多いのが特徴です。
住吉土人形(饅頭喰人形)	すみよしつちにんぎょう (まんじゅうくいにんぎょう)	1点	土製(陶製)		饅頭喰人形は、「父と母どちらが好きか?」と聞かれた子供が、饅頭を2つに割って「どちらが美味しい(うま)いか?」と聞き返したお話を基(もと)に、知恵(ちえ)のあることを授(さず)かるためのお守りとして各地で作られました。
住吉土人形(鯛の香盒)	すみよしつちにんぎょう (たいのこうごう)	1点	土製(陶製)		香盒(香合)とは、香物(こうもの)を入れるためのもので、おめでたいという意味で魚の「鯛」の香盒が製作されたそうです。
愛宕の人形硯	あたごのにんぎょうすずり	1点	石製		京都の嵯峨野(さがの)付近でとれる柔(やわ)らかい石を使ってつくられた硯(すずり)です。歴史上の人物や動物などの硯があり、愛宕神社の参拝客(さんぱいきやく)のお土産(みやげ)として売られていたそうです。
稻畑土人形	いなはたつちにんぎょう	1点	土製(陶製)		兵庫県の氷上郡(ひみぐん)(現・丹波(たんば)市)で作られた土人形です。江戸時代の終わり頃から作られ、明治時代には皇族(こうぞく)にも贈(おく)られるなど、名声(めいせい)がありました。現在も、丹波地方の工芸品(こうげいひん)として技術(ぎじゅつ)が継承されています。
おまじない玩具	おまじないがんぐ	7点			ミニチュアの玩具で、身に付けたり、部屋に置いたりすることで、おまじないになると説明書に書いています。
羽子板	はごいた	4点	木、布他		羽子板は、羽根つきの遊びとして使われるほか、生まれたばかりの女児が初めてお正月を迎える際に、邪氣(じき)を払って美しく成長する事を願って製作されました。
木製玩具(ピンボール)	もくせいがんぐ	1組	木製		
木製玩具(ボーリング)	もくせいがんぐ	1組	木製		
木製玩具(車と橋)	もくせいがんぐ	1組	木製		
ブリキ製玩具(こだま号)	ぶりきせいがんぐ	1点	ブリキ製	昭和	この「こだま号」は、東京～大阪間の特急電車(ときゅうえんしゃ)として、1958年～1964年の間に運行されました。「こだま」の名称(めいしょ)は全国からの応募(おうぼう)で決定されました。1964年に新幹線(しんかんせん)が開通すると、この特急電車に代わって、新幹線が「こだま」を名乗るようになりました。
ブリキ製玩具(バトカー)	ぶりきせいがんぐ	1点	ブリキ製	昭和	アメリカのフォード社製(しゃせい)の車のバトーカー玩具です。中を見ると左ハンドルになっています。
RCカー (スカイラインシルエット)	あーるしーかー	1点	プラスチック製	昭和	ラジオ(Radio)、コントロール(Control)の略で、リモコンを使用して操作する車のおもちゃです。日本では1950年代に作られ、1970年頃から一般に普及していきました。スカイラインシルエットという車は1980年代に日産(にっさん)が日本のカーレース用に開発した車で、この車には、長谷見昌弘(はせみまさひろ)選手が乗車していました。